

# ナデシコとクギのあいだ

——「ブラームスの子守歌」の第1節3行目  
„mit Näglein besteckt“ から ——

小 澤 昭 夫

<1>

戸日独協会の例会は、声楽家 S さんの指導のもと出席者全員でドイツ・リートを歌ってお開きとなる。

某年某月某日開催の第 8 回例会で取り上げられた一曲はブラームスの子守歌 „Guten Abend, gut' Nacht“ であった。

当日配られた楽譜から、その原詩と第 1 節の訳詞(訳者不詳)を示せば以下の通りである。なお楽譜の左下には <Worte: Str.1 „Des Knaben Wunderhorn“>の記載があり、原詩の第 1 節が『少年の魔法の角笛』から採られたことを示している<sup>1)</sup>。

Guten Abend, gut' Nacht,   おやすみ, おやすみ,  
mit Rosen bedacht,         ばらの花にかざられ  
mit Näglein besteckt,     なでしこの花をかざして

- 1) 手元にある „Des Knaben Wunderhorn—Alte deutsche Lieder“ (詳細は参考文献を参照) から該当する詩を示せば、下記のとおりである。これには <GUTE NACHT, MEIN KIND!> のタイトルがあるほか、5 行目の末尾が「ブラームスの子守歌」とは異なり <wenn's Gott will>である (同書 834 頁)。

GUTE NACHT, MEIN KIND!

Guten Abend, gute Nacht,  
Mit Rosen bedacht,  
Mit Näglein besteckt,  
Schlupf unter die Deck;  
Morgen früh, wenn's Gott will,  
Wirst du wieder geweckt.

schlupf unter die Deck!         さあ寝床にお入り。  
Morgen früh, wenn Gott will,

明日も朝早く神様がお言いつけになったら  
wirst du wieder geweckt.

お前をまた起こしてあげよう。

当日の例会は、R 町国際交流協会との共催であり、同協会の交流事業によって留学中のドイツ人高校生 J 嬢と G 君の二人 (ともに 17 歳) がゲストとして招かれていた。

さてこの歌詞の 3 行目の <mit Näglein besteckt>である。

Näglein は無論のこと Nagel の縮小形 (指小形)である。Paul/Betz の辞書によれば、Nagel の主要な意味は、「手または足の爪」と「物体に打ち込むための先の尖った道具」すなわち釘の二つで、意味の発生の古いのは前者である<sup>2)</sup>。

上の訳詞では、Näglein は「なでしこの花」である。この Näglein について会員の一人から質問が出た。その質問は、Nagel「爪、釘」の縮小形 Näglein が、花の「なでしこ」であることを確認するためのものであった。

それに対して、J 嬢が、意外にも片方の手の指先で別の腕の上腕部をチクチク刺すような身振りを示し、Näglein を文字通り「小さな釘」という意味に理解したらしいのである。

- 2) Paul/Betz: Deutsches Wörterbuch. Tübingen 1981. 「Nagel の項」

これ以降、文中で引用または言及する辞典等についての詳細は、一部を除いて参考文献欄に記す。

この時、この Nägelein は Nelke なのだと、当時の会長 H 氏から指摘されたのであった。

<2>

北垣篤の『ドイツの歌からドイツ語へ <Durch Lieder lernen wir Deutsch>』は、全12課に4月から3月までの一年を割り当てて12の歌を取り上げ、それぞれに「ことばの説明」を施し「歌のいわれ」を記している。これらのうち「10月の歌」が「ブラームスの子守歌」である。

その「ことばの説明」の中に Nägelein も取り上げられ、次のように書かれている。

das Nägelein, -s, - = das Nägelchen : die Nelke, -n (: pink, carnation) の Mundart.

bestecken (: plant with~), besteckte, besteckt とおぼえなさい。Mit Rosen bedacht と mit Nägelein besteckt は die Deck' (=die Decke =die Bettdecke) を形容している。

(同書34頁)

これに続いて Bettdecke については、「ベッドのおおい (装飾のためにベッドのシーツや毛布に掛けるもの)」との説明がある。

上記の北垣の説明によれば、Nägelein は Nelke の「方言 (Mundart)」ということになる。

また mit Rosen bedacht と mit Nägelein besteckt については、「die Deck' を形容している」とみなす北垣の説明と前出の訳詞とでは見解が分かれるようであるが、今はこの点には立ち入らない。

<3>

ドイツ語辞典を参照してみると、Nägelein の項に用例としてこの <mit Nägelein besteckt> を挙げているものはいくつかある。以下に示すのは Wahrig (1972年版) の記述である。

**Nägelein**, Nägelein <n.14; †; noch mundartl.>  
Nelke, Gewürznelke; mit~besteckt mit Nelken geschmückt [ <mhd. nagelîn; zu nagel „Gewürznelke“ ]

<mit Nägelein besteckt> は「ナデシコで飾られて mit Nelken geschmückt」と説明されている。

これが Brockhaus-Wahrig になると、同じく Nägelein の項に

mit~besteckt mit Nelken geschmückt  
(Zeile aus dem Lied „Guten Abend, gut' Nacht“)

とあり、この語句の出所がブラームスの子守歌であることも示されている。

上記の Wahrig によれば、Nägelein はすでに古語 (†=veraltet) であるが、北垣の説明にあったように、方言ではなおも使われていることになる。

ところがその意味には、Nelke とならんで Gewürznelke が示されている。この点は独和辞典の場合も同様で、例えば『小学館独和大辞典』では見出し語 Nägelein の項には次のように記されている。

**Nägelein** 田 -s/- 1 Nagel の縮小形。2【植】a) (Nelke) ナデシコ属。b) (Gewürznelke) チョウジ (丁子)。

すなわち Nägelein は、植物・植物学の分野では「(Nelke) ナデシコ属」と「(Gewürznelke) チョウジ (丁子)」の両方を指すわけである。しかも、Wahrig の語源情報によれば、Nägelein は「(Gewürznelke) チョウジ (丁子)」に由来するらしい。

なお、Wahrig の第8版 (2008年) では、Nägelein の項にもはや方言に関する記載はなく、その語義から Gewürznelke も消えている。

<4>

ところで「チョウジ」とは何か。

まず手元にある『カラー植物百科』を見ると次のように記されている。

チョウジ モルッカ諸島原産で、インドネシア、マダガスカル、ザンジバルなどで栽培されるフトモモ科の常緑高木。高さ10メートル内外、枝先に、淡紫色の4弁花を開く。つぼみが紅色になったころ採集し、乾燥したものを丁子(丁字、クローブ)といい、粉末にして消化促進、健胃剤、かぜ薬などとする。また蒸留して丁子油をとったり、香辛料としても用途が広い。(242頁)

「丁子」という名について若干補足すれば、「その形が釘状なので同音の丁をあてて丁子、丁香と名づけられ、また英名のクローブ clove もフランス語のクルー-clou(釘)に由来する」(『平凡社大百科事典』第9巻971頁)のであり、また丁子の「子」は「種子のように小さいものという意味」で「中国でこれを<sup>ちようこう</sup>丁香と呼ぶが、由来は、その強い芳香によっている」(『日本大百科全書』第15巻615頁)とのことである。

Gewürznelke についても見ておこう。

Brockhaus-Wahrig には

*als Gewürz verwendete getrocknete Blütenknospe des Gewürznelkenbaums*

とあり、チョウジノキ *Gewürznelkenbaum* のつぼみを乾燥させたもので、スパイスとして用いられることが判る。

Brockhaus-Wahrig が、チョウジノキ *Gewürznelkenbaum* の学名として示しているのは <*Syzygium aromaticum*> である。ところが事典によっては <*Eugenia caryophyllata*> あるいは <*Eugenia caryophyllata* oder *Syzygium aromaticum*> あるいはまた <*Syzygium aromaticum* = *Eugenia aromatica*> とまちまち

である。

「学者によって群の分け方に違いがあると同じ生物に幾つかの学名がつくことも珍しくない」(『カラー植物百科』78頁)とのことであり、『朝日百科植物の世界』によれば、「エウゲニア属 *Eugenia*」と「フトモモ属 *Syzygium*」の種の「分類学上の取り扱いの問題は、フトモモ科の分類がいかにもむずかしく、混乱が多かったか、そして今なお多いかという事実を端的に示している」(第4巻180頁)のである。因みに同書でも <*Syzygium aromaticum*> の学名が使われている。

<5>

すでに見たように、Nelke と Gewürznelke には Nelke という共通部分があるとはいえ、両者は全く別種のものである。では、Nelke と Gewürznelke の接点はどこにあるのか。

Kluge/Mitzka と Duden の二種類の語源辞典によれば、新高ドイツ語 nhd. の Nelke という語は、中世低地ドイツ語 mnd. の negelkīn, -ken, 低地ドイツ語 nd. の negelke から、neil-ke(n) を経て生じたものである。

この mnd. negelkīn, -ken は、中高ドイツ語 mhd. の negellīn と同様に Nagel の縮小形であり、それ故本来 „Nägelchen, Næg[e]lein“ を意味する。

mnd. negelkīn も mhd. negellīn も、最初は Gewürznelke すなわち海外が原産のチョウジノキ *Gewürznelkenbaum* の乾燥したつぼみを意味していた。

Gewürznelke は「その形が小さなクギに似ている in ihrer Form Ähnlichkeit mit einem kleinen Nagel haben」(Duden) からであり、「手で鍛造した昔のクギの姿 die Gestalt der alten, handgeschmiedeten Nägel」(Kluge/Mitzka) を思わせたからである。図1を参照。

花とのつながりが生ずるのは後のことで、この名前がスパイスから Gartennelke (*Dianthus*



図1 *Gewürznelkenbaum* (*Eugenia caryophyllata*),  
etwa 1/2 nat. Gr., a getrocknete Blüten-  
knospe.  
〔出典: dtv-Lexikon. Ein Konversations-  
lexikon. Bd. 7, S.259.〕

caryophyllus)に転用されたのである。「その花にチョウジのような香りがあるから weil die Blume einen gewürznelkenartigen Duft hat」(Duden)である。

ただ、Kluge/Mitzkaの方は、花の形にも触れ、「香りと花の形が似ているため wegen der Ähnlichkeit des Dufts und der Blütenform」と記している<sup>3)</sup>。

転用された時期は、Kluge/Mitzkaによれば15世紀、Dudenによれば16世紀である。

ここでGrimm辞典(Nelkeの項)も見えておくと、Nelkeは「中部ドイツ語 md. neilikin, nêlikinから縮約されて contrahiert aus md. neilikin, nêlikin」と記されている。これに続く説明によると、

- neilikin, nêlikinが縮小形であり中性名詞であることが、語末の-nの脱落后には、も

3) 地方によっては、*Syringa vulgaris*がNägele, Nägelchenと呼ばれるとのことである。この場合、「花の形が決定的だった」とするKluge/Mitzka(Nelkeの項)に対して、Sanders/Wülfig(Nagelの項)はチョウジと「半ばは形、半ばは香りが似ていること」を理由に挙げている。

なお、*Syringa vulgaris*は、ライラック、リラとして知られているもので、和名はムラサキハシドイである。

はや感じられなくなった

- 縮約は、頻繁に用いられた複数形でまず最初に生じた
- 複数形の die nelkenから新たな女性名詞単数形 die nelkeが作られた

とのことである。

チョウジの名が転用された Gartennelke の学名は *Dianthus caryophyllus* であり、「種小名のカリオフィルスは、花の香りがチョウジノキ(古い学名でカリオフィルス・アロマティクス *Caryophyllus aromaticus*) に似ていることにちなんでつけられた」(『朝日百科植物の世界』第7巻230頁)のである。

さてこの Gartennelke だが、これはナデシコ属 *Dianthus* には違いないが、カーネーションのことである。カーネーションならば、北垣篤が Nelke に対応する英語として示していたものである(2章参照)。『万有百科大事典19植物』を見ると「カーネーション」の項に、英仏独語の名称と学名が下記のように並記されている。

Ⓔ carnation Ⓕ œillet des fleuristes

Ⓖ Gartennelke/Ⓗ *Dianthus caryophyllus* L.

その解説によれば、「現在のカーネーションは原種のカリオフィルスにセキチクなどが交雑され、改良されたものと考えられている」(同書135頁)とのことである。

例えば『小学館独和大辞典』が、

**Nelke** 〔植〕1 ナデシコ(撫子)属(セキチク・カーネーションなどを含む): Chinesische~セキチク | Gartennelke カーネーション. 2(Gewürznelke) チョウジ(丁子).

と記しているように、Nelkeに「ナデシコ(撫子)属」と「チョウジ(丁子)」の両方の意味があるのは、上述のような背景があつてのことである。

<6>

前章でみた転用の件を、Nelke の項に語源情報として記している辞典は無論ある。以下に3例を挙げるが、引用中に現れる Nelke(2)あるいは(2)は、それぞれ Nelke の語義の(2)すなわち Gewürznelke を指している。

[nach dem der Nelke(2) ähnlichen Duft 「チョウジに似た香りによって」]

(Duden. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache.)

[frühhd., nach (2), wegen des gewürznelkenartigen Duftes bes. der Gartennelke; 「チョウジにならって、特にカーネーションのチョウジのような香りの故に」]

(Ullstein. Lexikon der deutschen Sprache.)

[...; urspr. (wegen der Form) Bez. für Gewürznelken, dann auf die Blume übertragen 「本来は(形の故に) チョウジの名称, その後花に転用」]

(Meyers Neues Lexikon. Band 5. S.548.)

前の2例では、チョウジに似た香りが転用の理由であるが、三番目の例では転用の事実がわかるだけである。

ここで、中低ドイツ語、中高ドイツ語の辞典に目を転じてみよう。

Lübbers の『中低ドイツ語辞典』では、**negelken** の語義には当然ながら *Gewürznägelein*<sup>4)</sup> しか記されていない。

Lexers の3巻本 (Handwörterbuch) では、*negellîn* の項の語義として <*kleiner nagel, gewürznelke, blumenpistill* (雌しべ)>がこの順序で現れる。*negelkîn* も合わせて示すと次のとおりである。

*negelkîn stn.* (I. 298<sup>b</sup>) *md. dim. zu nagel, gewürznelke.*

*negellîn stn.* (*ib.*) *dim. zu nagel, kleiner nagel. ...;*

4) この語は、後の章<7>と<9>でもまた触れるが、Gewürznelke と同義である。

*gewürznelke, ...; blumenpistill, ... .*

Lexers 3巻本は Benecke/Müller/Zarncke の辞書の索引も兼ねている訳だが、上の「(I. 298<sup>b</sup>)」は誤りで、実際には「(II. 298<sup>b</sup>)」でなければならない<sup>5)</sup>。

その Benecke/Müller/Zarncke の「(II. 298<sup>b</sup>)」で、*negellîn* 及び *negelkîn* の項を見ると下記のごとくである。

**negellîn, negelf, negel stn.** *die nelke, die blume wie das gewürz, besonders aber letzteres, beide male wohl nach der gestalt so genannt.*

**negelkîn, neilkîn, nêlikîn** (vgl. *neil=nagel*) *stn. deminutiv wie negellîn, ... die nelke, blume wie gewürz.*

これによれば、*negellîn* は Nelke であり、特にスパイスの方ではあるけれども、花もスパイスもどちらをも意味し、どちらの場合もその形によってそう名付けられたことになる。

ここからは、チョウジから花への転用ということも、その理由となった香りのことも判らない。もっぱら花の形だけが前面に出ているようである。

Paul/Betz の辞典 (Nagel の項) もまた、縮小形の *Nägelein* と *Nägelchen* が、frühhd. となおも方言で、クギと形が似ているために Nelke の名称として使われると記している。

次の引用は、<Goldener Kosmos-Tier-und Pflanzenführer> の Heide-Nelke *Dianthus deltoides* の解説の一部で、図2はその姿である。なお *Dianthus deltoides* は、和名ヒメナデシコである。

Die Blüte hat eine Gestalt wie ein Flachkopfnagel und das ergab den Namen für die Pflanze: *Nägelein, Näglein, Nälglein, Nelke.* (S. 202)

5) 同書付録の正誤表(冊子) <Berichtigungen zu Band I-III> (1979年版) にもこの箇所は記載されていない。



図2 Heide-Nelke *Dianthus deltooides*  
 [出典: Goldener Kosmos-Tier-und Pflanzenführer. S.203.] (ただし、原図はカラー)

「花は平頭クギのような形をしていて、そのことからこの植物の名前 Nägelein, Näglein, Nälglein, Nelke が生じた」

ここではもはや、転用の過程が抜け落ちて、花の形が植物の名と直結していると言えよう。転用から数百年を経た現在では、これも無理からぬことであろうか。

この点では、以下に示す『岩波独和辞典増補版』の記述は特筆に値する。チョウジの名の由来も、花への転用についても残らず伝えている

からである。

Nelke f., -n. (nd. 'Nägelchen')

【植】① (Gewürz-<sup>ㄨ</sup>) 丁子(ちぢも) (香料, 花が昔の釘の形に似る). ② (丁子に句の似る他の草花に移って:)石竹, 撫子; (Garten-<sup>ㄨ</sup>)カーネーション, おらんだなどでしこ.

<7>

チョウジ (丁子) を意味する Gewürznelke という語にもまた意外な成立事情がある。

Grimm 辞典の GEWÜRZNÄGELEIN, GEWÜRZNELKEN の項 (Bd. 7, Sp. 6866-6868) の記述から要点だけを示せば次のようになる。

- ・大抵は複数で用いられる。
- ・意味内容は, Gewürz- の付かないただの nägelein, nägelchen と本来同じである。
- ・外国種の香料植物 (チョウジ) をその土地の栽培植物 (Dianthus ナデシコ属) と区別する必要から, とりわけ辞書類においてこの合成語が生まれるに至った。
- ・後半部分が縮約した形の合成語すなわち Gewürznelken が, 特に専門用語に取り入れられた。

これによれば, 元々その名であったもの (チョウジ) を, あとから同じ名で呼ばれるようになったもの (ナデシコ属) と区別するために, 前者の方が Gewürz- が付いて合成語になったわけで, 本家が分家に家名を譲って自らは別姓を名乗ったような形である。

ただ, チョウジ油の場合は, 敢えて Gewürznelkenöl というまでもなく Nelkenöl の語を用いるのが一般的なようである。例えば Wahrig 第8版では, 見出し語としてあるのは Nelkenöl だけである。

なお, チョウジ油 (丁子油, 丁香油) とは, チョウジから得られる精油 <das ätherische Öl> で, その約 90% はオイゲノールからなり, 香料

やバニリン合成の原料となるほか、歯科学では防腐剤、局所麻酔剤として使われている<sup>6)</sup>。

<8>

現代ドイツ語から中高ドイツ語の語彙を求めるための索引がある。書名を<Neuhochdeutscher Index zum mittelhochdeutschen Wortschatz>という。

これによれば、Gewürznelkeを意味する中高ドイツ語には、nagel, nagelîn, negelkîn, negellînのほかにもうひとつ kâriôfelがある。

Lexer 小辞典, Lexer 3 巻本, Benecke/Müller/Zarncke の記述を順に示すと以下のとおりである。

**kâriôfel** gewürznelke (gr. lat. *caryophyllum*).  
**kâriôfel** (I. 790<sup>a</sup>) *gewürznelke*, caryophyllum…  
**KÂRÎÔFEL** *gewürznelke*; *καρυόφυλλον*.

Lexer と Benecke/Müller/Zarncke とでは、kariöfel の長音となる母音の位置に違いが見られる。それはさておき、kâriôfel はラテン語の *caryophyllum* に、それはさらにまたギリシア語の *karyophyllum* に由来することが判る。

ただし、『研究社羅和辞典』では、見出し語としてあるのは <caryophyllum, ī, n.> であり、これに「(植)チョウジ」の意味が記されている。

Lexer に現れる *caryophyllum* は、主格単数で -on で終わるギリシア系の中性名詞が、ラテン化されて -um となったものと考えられる<sup>7)</sup>。

チョウジは、アラビア人によって中世ヨーロッパの商取引に持ち込まれ、7世紀以来スパイスとして薬として貴重品であったが、その産

地がモルッカ諸島と知られたのは16世紀初めのことである<sup>8)</sup>。

これより早く、チョウジはギリシアや中国では紀元前から知られ、一世紀にはインドからローマにまで伝わっていたのである。1511年にポルトガル人が、1521年にスペイン人がモルッカ諸島に到達したのちには、このモルッカ諸島(別名「香料諸島 Gewürzinseln」)の領有と香料貿易の独占をめぐる、争奪戦が繰り広げられることになる<sup>9)</sup>。だがこの件については、この研究ノートの範囲外である。

<9>

Nelke がナデシコとチョウジの両方を意味するとすれば、母語話者ならばともかく、ドイツ語学習者にとって、どちらの Nelke なのか紛らわしいことはないであろうか。

以下に示すのは初級ドイツ語教科書に紹介されているグリューワイン Glühwein のレシピ<sup>10)</sup>である。

- 1 ℓ trockener Rotwein
- 1 ℓ Weißwein (z.B. Muskateller)
- 1/2 ℓ Weinbrand oder Cognac
- 1 Päckchen Orangenschalen-Aroma  
oder Schale von ungespritzter Orange
- 1 Stange Zimt
- 3 Nelken
- Ingwerpulver
- (dazu eventuell je 100g abgezogene Man-

6) 以下を参照した。  
 Der Große Brockhaus. Band 8, S. 159.  
 Meyers Neues Lexikon. Band 5, S. 548.  
 『万有百科大事典 19 植物』409 頁  
 『標準医語辞典 独・羅・英・仏-和』  
 7) 松平千秋/国原吉之助『新ラテン文法』南江堂,  
 1977 年改訂 8 版, 221 頁, § 621. の「注」を参照。

8) 『朝日百科 植物の世界』には、チョウジノキが「1797年にインドネシアのマルク(モルッカ)諸島で発見され」(第4巻182頁)たと記されているが、「1797年」は単なる勘違いか誤植であろう。  
 9) Meyers Neues Lexikon. Band 3, S.337.  
 Lexikon des Mittelalters. Band 4, Sp. 11432-34.  
 『日本大百科全書』第15巻615頁  
 『香料の歴史』66~71頁  
 10) 板山真由美/塩路ウルズラ/本河裕子/吉満たか子『自己表現のためのドイツ語1 (CD付き)』三修社, 2005年第18版, 84頁

deln und Rosinen, diese ganz zum Schluss einstreuen)

Alle Zutaten in einen großen Kochtopf geben und bei kleiner Hitze zum Kochen bringen. Sofort vom Feuer nehmen, in Gläser füllen.

ここには材料の一つとして<3 Nelken>がある。

Glühwein は、Klappenbach の辞典の説明には

**Glühwein**, der *alkoholisches Mischgetränk aus Rotwein, Zucker, Zimt und Gewürznelken, das heiß getrunken wird* :

とあり、「赤ワインと砂糖、シナモン、チョウジからなるアルコール混成飲料で、熱くして飲む」ものである。従って、レシピの Nelken もまたチョウジと理解される。

また Duden の辞典 (6 巻本) の Nelke の項を見ると、花としての第 1 の語義に続いて第 2 の語義としてチョウジが記され、用例も添えられている。

2. svw. ↑ Gewürznelke : Glühwein mit Zimtstangen u. -n würzen

すなわち、この場合の (Nelke)-n は Gewürznelke と同意語であり、用例はすなわち「グリュウワインにシナモンとチョウジで風味をつける」となる。

グリュウワインにおいては、このチョウジが相当に重要であるらしく、Grimm 辞典には次の用例が引かれている。

glühwein ist diejenige form des weines, in der der wein nichts und das gewürznägelchen alles bedeutet FONTANE (*L'Adultera*) I 3, 71.

「グリュウワインは、ワインの形はしていてもワインに大した意味はなくて、肝腎なのはチョウジなので

す」

この用例は、前述の見出し語 „GEWÜRZNÄGELEIN, GEWÜRZNELKEN“ の項に記されたもので、„gewürznägelchen“ はこれらと同義である。

上のレシピには赤ワインと同量の白ワインが記されているように、グリュウワインに用いられるのは赤ワインに限らないようである。

例えば、Bertelsmann Handlexikon には、Glühwein の項に „Seehund“ と „Admiral“ という固有名が記されている。前者は、白ワインにレモンの皮と砂糖を加えたもの、後者は、赤ワインにレモンと砂糖、チョウジかシナモンを加えたものである。ここでの「チョウジ」も原文は Nelken である (Rotwein mit Zitrone u. Zucker, Nelken oder Zimt : „Admiral“).

<10>

冒頭に紹介した J 嬢と J 嬢の身振りに話を戻そう。

J 嬢の出身地はノイブランデンブルク Neubrandenburg である。Neubrandenburg は、ドイツ北東部 Mecklenburg-Vorpommern 州の都市で人口約 6 万 5 千人 (2008 年 12 月 31 日現在)<sup>11)</sup>、地図上でみれば、ベルリンのほぼ真北およそ 100 キロのところにある。

すでに見てきたところによれば、Näglein は古語ではあるが地方によってはなおも使用されるのであった。ではこの Näglein が用いられるのはどのあたりかが次の問題である。

dtv-Lexikon (20 Bde.) は、Nelke の項で、次のように記している。

**Nelke** 1) *südd. Näglein, österr.-bayr. Nage(r)l, Dianthus*, Gattung der Familie *Nelkengewächse* (Karyophyllaceen) ;

11) ノイブランデンブルクの公式サイト <http://www.neubrandenburg.de> による。



つまり Näglein は南ドイツで使われることがわかる。

また、Kluge/Mitzka の Nelke の項には、

**Nelke** f. über *neilke* (n) aus mnd. *negelkēn*, -ken (hieraus dän. *nellik*, schwed. *nejlika*, lett. *nēg'el'ke'ne*), nd. *negelke*, der Entsprechung von md. Nägelchen (Luthers Form ist *nelichen*), obd. Nägelein, ahd. *negellī*, mhd. *negel* (l) *īn*.

とあり、nd. *negelke* から後の部分については、低地ドイツ語の *negelke* が md. Nägelchen, obd. Nägelein, ahd. *negellī*, mhd. *negel* (l) *īn* の相当語であると理解すべきであろう。

これによれば Nägelein は上部ドイツ語 obd. (= oberdeutsch) であり、いずれにしてもドイツ南部の方言である。

J嬢は北ドイツの人である。ドイツの方言地図<sup>12)</sup>を見ると、J嬢の出身地ノイブランデンブルクは、間に中部ドイツ語の地域をはさんで、上部ドイツ語の使用地域の遙か圏外である。少々強引に結論づければ、ナデシコを意味する Näglein が J嬢の語彙になかったとしても不思議ではないのである。

## 参考文献

- Aichele/Schwegler/Zahradnik/Cihar : Goldener Kosmos-Tier- und Pflanzenführer. Unsere Flora und Fauna. 2. Aufl. Stuttgart 1987. (Kosmos Naturführer)
- Benecke/Müller/Zarncke : Mittelhochdeutsches Wörterbuch. 3 Bde. Hildesheim/Zürich/New York 1986 (3. Nachdruckauf-

- lage der Ausgabe Leipzig 1854-1866). Bertelsmann Handlexikon. Gütersloh/Berlin/München/Wien 1975.
- Brockhaus-Wahrig. Deutsches Wörterbuch. 6 Bde. Wiesbaden/Stuttgart 1980-84.
- Der Brockhaus in einem Band. Leipzig/Mannheim<sup>13</sup>2009.
- Der Große Brockhaus. 12 Bde. Wiesbaden<sup>18</sup>1977-81.
- Des Knaben Wunderhorn. Alte deutsche Lieder gesammelt von L. Achim von Arnim und Clemens Brentano. Vollständige Ausgabe nach dem Text der Erstausgabe von 1806/1808. Mit einem Nachwort versehen von Willi A. Koch. Darmstadt 1977.
- dtv-Lexikon. Ein Konversationslexikon. 20 Bde. München 1980. (dtv 3051-70)
- Duden. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache. 6 Bde. Mannheim/Wien/Zürich 1976-1981.
- Duden. Die deutsche Rechtschreibung. Mannheim/Wien/Zürich<sup>25</sup>2009. (Duden Bd.1)
- Duden. Etymologie. Herkunftswörterbuch der deutschen Sprache. Mannheim/Wien/Zürich<sup>2</sup>1989. (Duden Bd. 7)
- Duden. Rechtschreibung der deutschen Sprache und der Fremdwörter. Mannheim/Wien/Zürich<sup>19</sup>1986. (Duden Bd. 1)
- Fontane, Th.: Werke. Hg. v. M. Bertram. Berlin 1998. (Digitale Bibliothek, Bd. 6)
- Götze, A.: Frühneuhochdeutsches Glossar. Berlin<sup>7</sup>1967.
- Grimm, J. u. W.: Deutsches Wörterbuch. 33 Bde. München 1984 (Fotomechan. Nachdr. d. Erstausg. 1854-1971). (dtv 5945)
- Hennig, B.: Kleines Mittelhochdeutsches Wörterbuch. Tübingen<sup>2</sup>1995.
- Klappenbach, R./Steinitz, W.: Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache. 6 Bde. Berlin 1977-78.
- Kluge, F./Mitzka, W.: Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. Berlin/New York<sup>21</sup>1975.
- Knauers Kulturführer in Farbe. Deutschland.

12) 以下を参照した。  
「方言分布図」(『小学館独和大辞典』2684頁)  
「現代のドイツ語方言」(『図説』ドイツ語の歴史』202頁)  
「ドイツ語圏方言区分地図」(『ドイツ言語学辞典』1156-1157頁)  
「ドイツ方言分布図」(『大独和辞典』表紙見返し)

- München 1991.
- Köbler, G.: Taschenwörterbuch des althochdeutschen Sprachschatzes. Paderborn/München/Wien/Zürich 1994. (Uni-Taschenbücher 1823)
- Koller, E./Wegstein, W./Wolf, N. R.: Neuhochdeutscher Index zum mittelhochdeutschen Wortschatz. Stuttgart 1990.
- Lexler, M.: Mittelhochdeutsches Handwörterbuch. 3 Bde. Stuttgart 1979 (Reprogr. Nachdr. der Ausgabe Leipzig 1872-1878).
- Lexler, M.: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch. Stuttgart <sup>38</sup>1992.
- Lexikon des Mittelalters. 9 Bde. München 2003. (dtv Taschenbuchausgabe)
- Lübbers, A.: Mittelniederdeutsches Handwörterbuch. Nach dem Tode des Verfassers vollendet von Christoph Walter. Darmstadt 1995 (Reprogr. Nachdr. der Ausg. Norden und Leipzig 1888).
- Meyers Neues Lexikon. 8 Bde. Mannheim 1978-81.
- Paul, H./Betz, W.: Deutsches Wörterbuch. Tübingen <sup>8</sup>1981.
- Sanders/Wülfing: Handwörterbuch der deutschen Sprache. Leipzig/Wien <sup>8</sup>1911.
- Schützeichel, R.: Althochdeutsches Wörterbuch. Tübingen <sup>2</sup>1974, <sup>6</sup>2006.
- Ullstein. Lexikon der deutschen Sprache. Frankfurt/Berlin 1969.
- Wahrig. Deutsches Wörterbuch. Gütersloh/München <sup>8</sup>2008.
- Wahrig, G.: Deutsches Wörterbuch. Gütersloh/Berlin/München/Wien 1972.
- Wahrig. Illustriertes Wörterbuch der deutschen Sprache. Aktualisierte Sonderausgabe für die ADAC Verlag GmbH. München 2004.
- Weigand/Hirt: Deutsches Wörterbuch. 2 Bde. Berlin 1968 (Photomechanischer Nachdruck der 5. Auflage Gießen 1909-10).
- 『朝日百科 植物の世界』全15巻, 朝日新聞社, 1997年
- 『岩波独和辞典増補版』岩波書店, 1982年第32刷
- 『カラー植物百科』平凡社, 1976年初版第4刷
- 北垣 篤『ドイツの歌からドイツ語へ(Durch Lieder lernen wir Deutsch)』南江堂, 1985年第6版
- 工藤康弘/藤代幸一『初期新高ドイツ語』大学書林, 1992年
- 『原色牧野植物大図鑑』北隆館, 1986年5版
- 『講談社オランダ語辞典』講談社, 1994年
- 『事典 現代のドイツ』大修館書店, 1998年
- 相良守峯『大独和辞典』博友社, 1974年
- 『小学館独和大辞典』小学館, 1985年初版1刷, 1990年コンパクト版初版1刷
- ヨアヒム・シルト(橘好碩訳)『[図説]ドイツ語の歴史』大修館書店, 1999年
- 田中秀央『研究社羅和辞典』研究社, 1977年増訂新版第11刷
- 『ドイツ言語学辞典』紀伊國屋書店, 1994年
- 『日本大百科全書』全25巻, 小学館, 1984-89年
- 『万有百科大事典19植物』小学館, 1981年2版
- 『標準医語辞典 独・羅・英・仏・和』南山堂, 1984年第34版10刷
- 藤代幸一/檜枝陽一郎/山口春樹『中世低地ドイツ語』大学書林, 1987年
- 『平凡社大百科事典』全16巻, 平凡社, 1984-85年
- 山田憲太郎『香料の歴史』紀伊國屋書店, 1994年(紀伊國屋新書B-14『香料の歴史』の復刻)
- 渡辺格司『低ドイツ語入門』大学書林, 1985年第3版

\* 独和辞典については、引用または注に使用したものだけを挙げた。